

# Kokoro's

学校から学校へ旅する **ココロの本箱**

# Traveling Bookcase

なぜ  
ユダヤ人は  
迫害されたの？

どうして  
ヒトラーは  
支持されたの？

私たちに  
できることは  
あるの？

## ホロコーストを学び考えるための20冊

第二次世界大戦時にヨーロッパで起きた虐殺、ホロコースト。「ユダヤ人に生まれた」、ただそれだけの理由で殺された人が約600万人。そのうち約150万人は子どもでした。障害者や同性愛者、ロマの人々も犠牲となりました。差別や偏見、異なるものを受け入れることができない人間の弱さ、ホロコーストをつくりだしたものは、私たちの身近なところにもあります。学びを深めるために、ぜひ手にしてほしい20冊を選びました。皆さんの学校から、また次の学校に届けてもらう旅する本箱です。Kokoroと一緒に人間を探求し、広い世界を見つめてみませんか。

NPO法人ホロコースト教育資料センター (Kokoro)



# ココロの本箱

## ホロコーストを 学び考えるための 20冊



### 1 日本の中学・高校生の 疑問から生まれた実話



『ハンナのかばん  
アウシュビッツからのメッセージ』  
カレン・レビン/著 石岡史子/訳  
ポプラ社

アウシュビッツから Kokoro に届いた旅行かばん。持ち主のハンナって誰？調べてみると、ハンナのお兄さんは虐殺を生きのびていたことが分かり…。半世紀の年月を経て生まれた出会いの物語。

### 2 自由、人権、民主主義 どんな社会に生きたい？



『ヒトラーとナチ・ドイツ』  
石田勇治/著  
講談社

ヒトラーはなぜ人気があったのか。どうやって独裁者が生まれたのか。人権と民主主義はいかにして守ることができるのか。日本におけるナチ・ドイツ研究の第一人者、石田勇治先生の。

### 3 70年後にこの本が 書かれた理由は？



『4歳の僕はこうしてアウシュビッツから生還した』  
マイケル・ボーンスタイン、デビー・ボーンスタイン・ホルンスタート/著  
森内薫/訳 NHK出版

アウシュビッツ解放時、約7,000人の生存者がいた。そのなかに、母の勇気と奇跡によって生きのびた4歳の少年がいた。しかし、憎しみや差別が残る世界で少年はさらなる苦しみを体験する。

### 4 希望も絶望もない 人間が「無」となる時



『改訂完全版 アウシュビッツは終わらない これが人間か』  
ブリーモ・レーヴィ/著 竹山博英/訳  
朝日新聞出版

著者は、イタリアで反ナチのレジスタンス(抵抗)活動中に捕らえられ、アウシュビッツへ送られた。ホロコーストの犠牲者と加害者の間には何があるのか。両者は異なる種類の人間なのか。

### 5 忘れない、だけじゃない ドイツの今の姿



『忘却に抵抗するドイツ 歴史教育から「記憶の文化」へ』  
岡裕人/著  
大月書店

ドイツには「記憶の文化」という言葉がある。ナチ時代の歴史と向き合い、学ぶ機会をつくり、繰り返し伝え、共有し、より良い社会をつくらうという挑戦。その歩みは決して容易ではない。

### 6 ドイツ人の子どもが 見たホロコースト



『そこに僕らは居合わせた 語り伝える、ナチス・ドイツ下の記憶』  
グールドルン・パウゼヴァング/著  
高田ゆみ子/訳  
みすず書房

日常生活のなかで、普通の人びとがいかにして全体主義の狂気にのみこまれていったのか。終戦当時17歳だったドイツ人著者が自らの体験や見聞きしたことをもとに綴る20の物語。

### 7 ナチに抵抗した 学生たちがいた



『正義の声は消えない 反ナチス・白バラ抵抗運動の学生たち』  
ラッセル・フリードマン/著  
渋谷弘子/訳  
汐文社

ハンスとゾフィーの兄妹と仲間の学生たちは、人間の権利と自由を守るため、戦争を終わらせるため、自分たちの信念を言葉にした。彼らが命をかけて守りたかった自由とは何なのだろう。

### 8 それでも、人は生きる



『夜と霧 新版』  
ヴィクトール・E・フランクル/著  
池田香代子/訳  
みすず書房

肌を突き刺す寒さのなか、殴られ、蹴とばされ、飢えに苦しめられる。極限状態に追い込まれて、それでもなお、フランクルは問い続けた。生きる意味とは。人間とは何者なのか。

### 9 アジアの戦争を知る ことで世界を広げよう



『若者から若者への手紙 1945-2015』  
落合由利子/写真  
北川直実、室田元美/著  
ころから

ホロコーストと同じ時に、アジアの戦争で日本は多くの命を奪った。一人ひとりの体験に私たちはどれだけ寄り添うことができるだろう。

### 10 ハンナの兄ジョージと 仲間たちの物語



『テレジンの子どもたちから ナチスに隠れて出された雑誌「VEDEM」より』  
林幸子/著  
新評論

10代の少年たちはナチの強制収容所のなかで、秘密の新聞をつくった。タイトルは、「僕たちがリーダーだ」。仲間と助け合い、学び合い、それは、その日一日を生きる希望に繋がった。

### 11 こんなにも身近に ある記憶



『ルポ土地の記憶 戦争の傷痕は語り続ける』  
室田元美/著  
社会評論社

人はなぜ記憶するのか。思い出すことが辛い記憶と私たちはどう向き合えばいい？ 私たちの暮らす街にも、あの時代の記憶は刻まれている。その記憶を大切に守ろうとしている人たちがいる。

### 12 大学生になったら 一緒に旅しよう



『「ホロコーストの記憶」を歩く——過去をみつめ未来へ向かう旅ガイド』  
石岡史子、岡裕人/著  
子どもの未来社

ページをめくりながら、ドイツの首都ベルリンや、アンネが隠れたアムステルダム街の今の姿を見てみよう。収容所跡は大切に保存され、ホロコーストの記念碑は今も新しく作られている。

### 13 広島に被爆者が追い 続けたアンネとその時代



『アンネ・フランク その15年の生涯』  
黒川万千代/著  
合同出版

著者は、アンネと同じ年に生まれ、広島で被爆した。自らの体験を語り、アンネの足跡をたどり、アンネを知る人から直接話を聞いた。アジアにも旅をして、日本の占領下で傷ついた人々とも出会った。

### 14 約20万人の障害者も 殺された



『わたしで最後にして ナチスの障害者虐殺と優生思想』  
藤井克徳/著  
合同出版

「豊かな国をつくるために障害者はいらない」、「障害の苦しみから死をもって救うのだ」そう信じて、医師や看護師は障害者を殺した。すべての命は平等。その理由を私たちは言葉にできるだろうか。

### 15 国や民族の違いをこえて 人を人として尊重する



『六千人の命を救え! 外交官・杉原千畝』  
白石仁章/著  
PHP 研究所

救いを求めてやってきたユダヤ人を見捨てることはできない。しかし、ビザを発給してはならないという日本政府。悩んだ千畝は、何よりも「人道と博愛」を重んじる決断をした。

### 16 母はそのとき貨車から 赤ん坊を投げた



『エリカ 奇跡のいのち』  
ルース・バンダー・ジー/文  
ロベルト・インノチェンティ/絵  
柳田邦男/訳  
講談社

人間がモノのように扱われ、貨物列車に押し込まれて、強制収容所に送られた。その貨車を運転していた人がいた。貨車の運行スケジュールを作っていた人がいた。

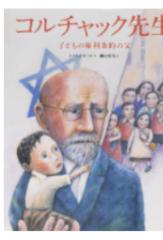
### 17 写真でたどる 難民たちの足跡



『杉原千畝と命のビザ シベリアを越えて』  
寿福 滋/写真・文  
サンライズ出版

ビザを手にしたユダヤ人たちは、シベリア鉄道で大陸を横断し、海を越えて、日本までたどり着く。その後の運命は？ 大切な家族や故郷を後にして、難民たちはどんな思いで逃げたのか。

### 18 200人の孤児とガス室へ



『コルチャック先生 子どもの権利条約の父』  
トメク・ボガツキ/作 柳田邦男/訳  
講談社

著名な作家、医師であり、孤児院の院長だったコルチャック。「今を生きている人間」として子どもを尊重するというコルチャック先生の教育実践は、「子どもの権利条約」の中に息づいている。

### 19 ガス室はある日突然 作られたわけじゃない



『なぜ、おきたのか? —ホロコーストのはなし』  
クライヴ・A・ロートン/作  
石岡史子/訳 大塚 信/監修・訳  
岩崎書店

たとえば今から12年後の自分を想像できる? ナチ政権下で差別が始まり、虐殺が起きるまで、12年間。一つ一つ順序があった。その過程を写真で分かりやすくたどることができる一冊。

### 20 知りたかった疑問への 答えがきっと見つかる



『アンネのこと、すべて』  
アンネ・フランク・ハウス/編  
小林エリカ/訳 石岡史子/監修  
ポプラ社

アンネ・フランクの隠れ家は、毎年120万人以上が見学に訪れる。隠れ家を保存・公開するアンネ・フランク・ハウスが、世界中の子どもたちから寄せられる質問に答えるために作った本。